

佐敷上グスク

- 平成12年度～平成14年度範囲確認調査概報



2003年 3月

沖縄県佐敷町教育委員会



写真1 佐敷上グスク遠景（西側より）

はじめに

本町は、沖縄県の南部、太平洋に面した中城湾の南に位置し、北風を受ける馬蹄の形をしています。佐敷上グスクはちょうど、町の中心地である字佐敷集落内の丘陵、標高約20m～50mにあり、北側の中城湾を遠くに勝連半島が、また町内は東側の仲伊保から西側は津波古まで一望できる景勝地であります。

佐敷上グスクは、1979年に発掘調査をしてから、約20年後に町内遺跡詳細分布調査で城郭確認の試掘調査をいれました。その結果、県内で類例のない斜面を利用して造成された石列が発見され、その重要性を再確認しました。この貴重な史跡を、未来を開拓する子供達に残すために、平成12年度から範囲確認調査を開始いたしました。

3カ年の事業では、従来の城域がさらに西側へ広がることや、一部に石垣を用いていたこと等が判明致しました。しかしながら、内部の平場構造が未だ明確にはなっておりません。そのため、ひきつづき範囲確認調査を実施していきたいと考えております。

また一方では、町の活性化の施策として、「尚巴志ハーフマラソン」・「尚巴志文化まつり」等、佐敷上グスクに居城したと伝えられる尚巴志を称え、その名前を冠した事業を近隣市町村・関係機関に協力をあおぎ開催しています。

これから先、尚巴志が三山統一を志し、立ち上がった町として県内外にアピールするとともに、その居城と伝わる佐敷上グスクの歴史性を解明していきたいと考えております。

最後になりますが、文化庁をはじめとする関係機関、研究機関等、本事業にご指導・ご協力頂きこころより御礼申し上げます。

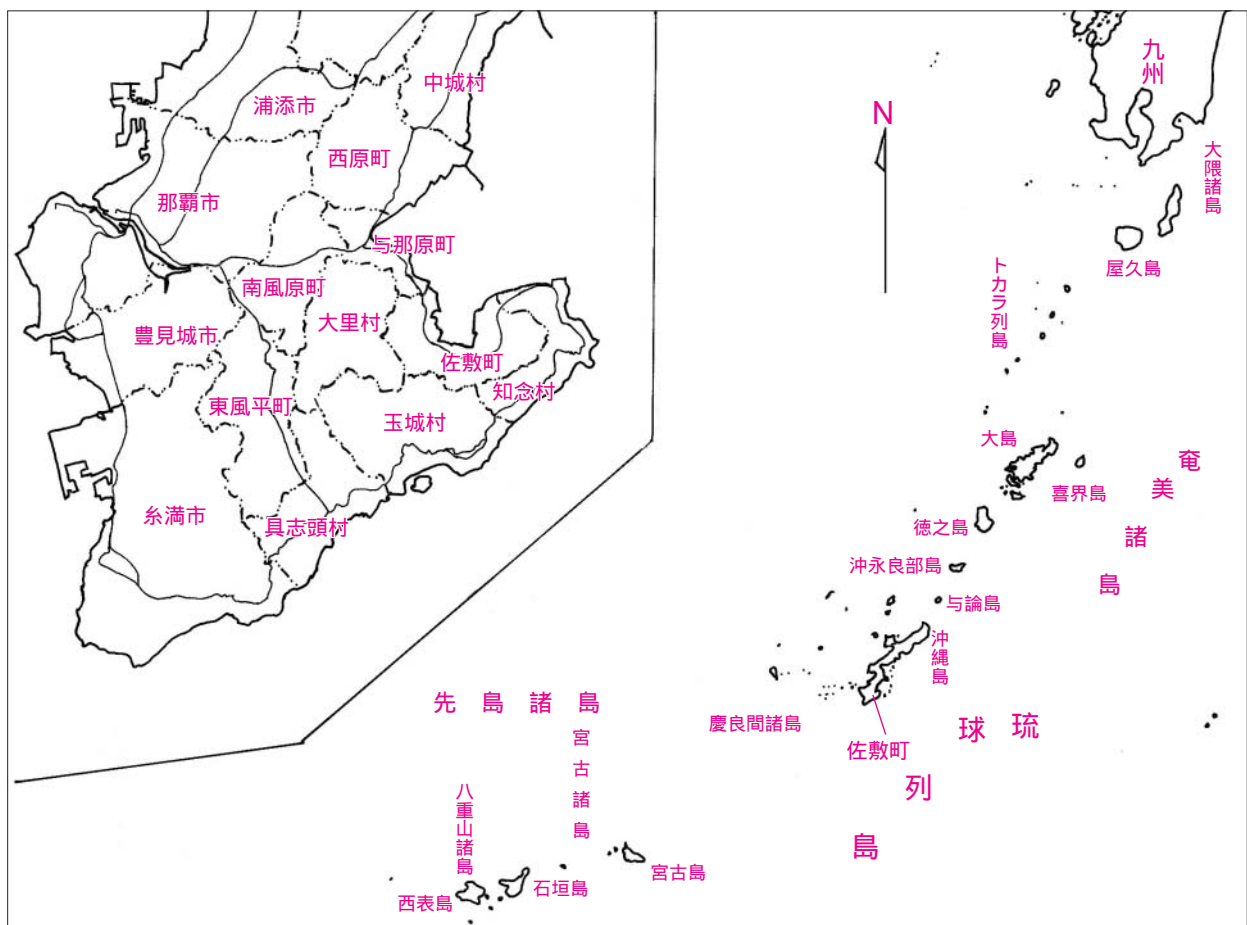
平成14年3月
沖縄県佐敷町教育委員会
教育長 上原 弘一



写真2 スナップ①

凡 例

- 1：本書は平成12年度から平成14年度にかけて行われた佐敷上グスクの範囲確認調査概報である。
- 2：字佐敷遺跡分布図（第2図）は、「佐敷町文化財調査報告書第2集 佐敷町の文化財」より抜粋、一部修正を加えたものである。
- 3：佐敷上グスク周辺地形図および調査地区位置図（第4図）は、調査時に測量した地形図と、佐敷町役場発行の5,000分の1（平成6年度調製）地形図を使用し、作成したものである。
- 4：遺物撮影には、琉球大学法文学部考古学研究室の協力を得た。



第1図 佐敷町位置図

目 次

はじめに

凡 例

目 次

1：調査について				P1
<hr/>				
2：佐敷上グスク周辺地域の状況				P2
<hr/>				
* 美里殿	P3	* 苗代大比屋の屋敷跡		P3
* 苗代殿	P3	* 佐敷ようどれ		P3
* タキノー	P6	* 佐敷上グスク関連遺跡		P6
* 旧道	P6	* 下代原遺跡		P6
<hr/>				
3：調査状況				P7
<hr/>				
1) 平成12年度				P7
① Fトレンチ	P7	② Gトレンチ		P7
③ Hトレンチ	P10	④ Iトレンチ		P10
2) 平成13年度				P11
① Jトレンチ	P11	② Kトレンチ		P11
③ Lトレンチ	P12	④ Mトレンチ		P12
⑤ Nトレンチ	P12	⑥ Oトレンチ		P12
⑦ Pトレンチ	P13	⑧ Qトレンチ		P13
⑨ Rトレンチ	P13	⑩ Sトレンチ		P13
3) 平成14年度				P14
① Tトレンチ	P14	② Uトレンチ		P14
③ Vトレンチ	P15	④ Wトレンチ		P15
<hr/>				
4：出土遺物				P16
<hr/>				
① グスク土器	P16	② 類須恵器		P16
③ 白磁および青白磁	P16	④ 青磁		P17
⑤ 染付（青花）	P17	⑥ 東南アジア産陶器		P18
⑦ 天目	P18	⑧ 沖縄産陶器		P18
⑨ 鉄製品	P18	⑩ おはじき・碁石		P19
⑪ その他（瓦・玉・指輪・石器類）	P19	⑫ 食物残滓		P20
<hr/>				
5：まとめ				P21
<hr/>				
6：今後の課題				P22
<hr/>				
（参考文献・調査組織）				P23

目 次

第1図 佐敷町位置図	
第2図 字佐敷遺跡分布図	P4・5
第3図 平成12年度 佐敷上グスク調査箇所	P7
第4図 佐敷上グスク周辺地形図および調査箇所位置図	P8・9
第5図 平成13年度 佐敷上グスク調査箇所	P11
第6図 平成14年度 佐敷上グスク調査箇所	P14

写 真 目 次

写真1 佐敷上グスク遠景（西側より）	写真2 スナップ①
写真3 スナップ② P1	写真4 スナップ③ P1
写真5 字佐敷遠景（北西側・平良川原より） P2	写真6 美里殿 P3
写真7 苗代大比屋の屋敷跡内拝所 P3	写真8 苗代殿 P3
写真9 佐敷ようどれ P3	写真10 タキノー P6
写真11 佐敷上グスク関連遺跡 P6	写真12 旧道 P6
写真13 下代原遺跡 P6	写真14 Fトレンチ 近世の包含層（西側より） P7
写真15 Gトレンチ 土坑掘り下げ状況（北側より） P7	写真16 佐敷ノ口殿内 P10
写真17 Hトレンチ 貼石状石列（北側より） P10	写真18 I - 1トレンチ 完掘状況（北側より） P10
写真19 I - 3～5トレンチ 段状地形（南側より） P10	写真20 Jトレンチ 完掘状況（南東側より） P11
写真21 Kトレンチ 石列（北東側より） P11	写真22 Lトレンチ 貼石状石列（南西側より） P12
写真23 Mトレンチ 石積（南側より） P12	写真24 Nトレンチ 段状造成（北西側より） P12
写真25 Oトレンチ 石積など（南西側より） P12	写真26 Pトレンチ 貼石状石列（西側より） P13
写真27 Qトレンチ 貼石状石列（北東側より） P13	写真28 Rトレンチ 貼石状石列（北東側より） P13
写真29 Sトレンチ 貼石状石列（北東側より） P13	写真30 Tトレンチ 石積根石（南側より） P14
写真31 Uトレンチ 石積根石（西側より） P14	写真32 Vトレンチ 石積など（北西側より） P15
写真33 Wトレンチ 石積（北側より） P15	写真34 出土遺物1 グスク土器 P16
写真35 出土遺物2 類須恵器 P16	写真36 出土遺物3 白磁・青白磁 P16
写真37 出土遺物4 青磁（碗） P17	写真38 出土遺物5 青磁（盤・皿） P17
写真39 出土遺物6 青磁（その他） P17	写真40 出土遺物7 染付（青花） P17
写真41 出土遺物8 東南アジア産陶器 P18	写真42 出土遺物9 天目 P18
写真43 出土遺物10 沖縄産陶器 P18	写真44 出土遺物11 鉄製品①（鉄鏃・刀子・切羽・鉄滓） P18
写真45 出土遺物12 鉄製品②（角釘） P19	写真46 出土遺物13 おはじき・碁石 P19
写真47 出土遺物14 その他（瓦） P19	写真48 出土遺物15 その他（玉・指輪） P19
写真49 出土遺物16 獣骨①（ウシ） P20	写真50 出土遺物17 獣骨② P20
写真51 出土遺物18 亀腹甲 P20	写真52 出土遺物19 魚骨 P20
写真53 出土遺物20 その他（石器類・表） P24	写真54 出土遺物21 その他（石器類・裏） P24
写真55 スナップ④ P25	写真56 スナップ⑤ P25
写真57 スナップ⑥ P26	写真58 スナップ⑦ P26

1：調査について

佐敷町では、佐敷グスク及び周辺整備基本計画報告書を策定し、尚巴志に関わる文化財の保存・活用を推進することをうたっている。また近年、町内の開発が増加し、先人の遺跡や古墓・御嶽などの文化財が破壊・消滅の危機にさらされていることから、平成10・11年度にこれらの文化財の確認調査を行うこととなった。この調査は文化庁の補助事業として沖縄県教育委員会の指導のもと、佐敷町で初めておこなった町内遺跡詳細分布調査である。

町内遺跡詳細分布調査は踏査と試掘を行い、踏査によってグスク時代から近世にかけての46箇所の遺物散布地を確認し、また、試掘調査は町内9カ所で行われ、このうち佐敷上グスク周辺では5箇所の調査区を設けた。中でも、上グスクでは「つきしろの宮」本殿後方の石が散在する場所にAトレンチ、「つきしろの宮」拝殿東側の斜面にBトレンチ、駐車スペースとして利用される広場に建てられたコンクリート製舞台の北側にCトレンチを設置した。また、上グスク東側にある「美里殿」近くにDトレンチ、上グスクの西側にある丘陵（通称：タキノー）にEトレンチを設定した。その結果、佐敷上グスクにはこれまでないとされてきた石積みや、県内で類例の見られない「貼石状石列」をもつ城壁があったことが確認された。また、周辺の調査区では15世紀から16世紀の青磁片が見つかっており、佐敷上グスクとの関連を持つ遺跡が周辺に有ることをうかがわせた。

このようななかで、上グスクが所在する字佐敷集落では、上グスク西側に水タンクが設置されて水事情が好転したことから、新たな住宅建築が増加することが懸念された。

そこで、佐敷上グスクの城域を確認し、文化財としての適切な保存・活用を行う必要から、平成12年度から平成14年度の3カ年事業として、国・県から重要文化財等緊急調査の国庫補助金を得て調査に着手した。

調査は、雨の少ない夏を中心に2ヶ月程度おこない、補完調査がある場合には年明けの時期を利用して進めた。また、年度ごとの調査目的により、試掘を入れる個所は上グスクの周辺を飛び石状に設置することとなった。

遺物の取り上げについては、年代が判別できるもの、あるいは5cm角以上のものはできるだけ遺物分布図を作成して取り上げることにした。

調査初年度である平成12年度は、平成10年度に確認した斜面に造成される貼石状石列が、北側から北西側にかけての斜面で確認できるかを調べるために2カ所の試掘区を設置した。また、平場での遺構確認のため2カ所の試掘区を設置した。試掘調査期間は8月から9月の2ヶ月間でおこなった。

平成13年度は、8月から9月に試掘調査、3月に補完調査日程をとった。調査は上グスク西側の斜面や平場において、遺構の有無を調べるために5カ所の試掘区を設定した。また、北東側の斜面にも貼石状石列の状況を確認するための試掘区を5カ所設定した。

平成14年度は、8月から9月、および3月に発掘調査を行なった。調査は上グスク主体部内を主に、平場の境界確認の試掘区を3カ所、上グスク主体部への旧入り口確認の試掘区を2カ所設定した。

また、平成14年度9月には沖縄県教育庁文化課との間で、佐敷上グスク範囲確認調査事業延長を調整した。このため、今回は3カ年の調査概要を報告することになった。



写真3 スナップ②



写真4 スナップ③

2：佐敷上グスク周辺地域の状況

佐敷町は、沖縄島の島尻郡に属し、北側に中城湾を望み、東側から西側を石灰岩の丘陵に囲われる半擂鉢状の地形をしている。石灰岩丘陵から平野部にかけては、地質的に地すべりしやすいクチャ層が堆積している。この地質に加えて北側から海流が入り込んでくる中城湾に接することから、海岸のほとんどが干潟であり、砂浜は字津波古および字仲伊保の一部に確認されるにすぎない。

佐敷上グスクは佐敷町の中央に位置する字佐敷集落の南側、標高約10mから50m前後の舌状丘陵にある。この丘陵も地すべりしやすいクチャ層であり、佐敷上グスクはこの丘陵端部を利用して造成されている。一般的に琉球のグスクは石灰岩丘陵上に多いが、佐敷町においては上グスクをはじめとして下代原遺跡、屋比久グスク、平良川原遺跡など、同時期の遺跡が埋蔵されていると考えられる場所あるいは文化財所在地は、ほとんどが地すべりしやすい丘陵上にある。これは佐敷町の地質的な特徴による立地と考えられる。

さて、佐敷上グスクを中心とした周辺には、東西約1200mの範囲に渡って、グスク時代から近世にかけての遺跡や遺物散布地が広がっている。この範囲内には、尚巴志にまつわる伝承・伝説などを残す拝所や場所も点在している。上グスクから西側の峡谷を挟んで、佐敷上グスクの見張り台的遺構があったと推測されるタキノーの丘陵や、上グスクと同時代の遺跡と考えられる下代原遺跡が広がる斜面地がある。さらに南側の丘陵台地上に広がる航空自衛隊知念分屯基地内には、尚思紹などの墓である佐敷ようどれが建っている。

一方、東側には、尚巴志の父親である尚思紹が住んでいたと伝わる苗代大比屋の屋敷跡や、苗代殿、美里殿など、尚巴志ゆかりの伝説・伝承などを残す拝所が点在している。これら拝所周辺でも、青磁片や土器片などが表されており、佐敷上グスクと何らかの関わりをもつ遺跡が埋蔵していることが想定される。またこのほかにも、字新里場天原に尚巴志と関わりのある佐銘川大主が居住したとされる場所があるが、1937年の地すべりにより付近の桃原集落とともに地中に姿を消している。



写真5 字佐敷遠景（北西側、平良川原より）

* 美里殿（ンザトゥドゥン）

佐敷上グスクから東側約100mのこんもりとした林の中にある。第一尚氏王統尚思紹の舅である美里子の住居があった場所と伝わる。現在は、コンクリート製の拝所がもうけられている。その一部に、かつて礎石として利用されていたと思われるニービ（微粒砂岩）の石材がはめこまれている。

また、近くには、美里殿の用水井戸であった美里井（ンザトゥガー）がある。美里井はノ口達のみそぎの場であったと伝えられている。



写真6 美里殿



写真7 苗代大比屋の屋敷跡内拝所

* 苗代大比屋の屋敷跡（ナーシルウフヤの屋敷跡）

第一尚氏初代王である尚思紹が、苗代大比屋として佐敷に住んでいたときの屋敷があったと伝わる場所である。

苗代大比屋は、尚巴志の親と言われているが、伝承の中には、育ての親であり、生みの親が佐銘川大主という話もある。

現在は、尚思紹の位牌等をまつるコンクリート製の建物があり、地元では神アシャギと呼んでいる。

* 苗代殿（ナーシルドゥン）

苗代大比屋の屋敷跡の西側にある小道を奥に進んでいくと、石柱が2本建っている場所がある。そこに、美里殿と同様にコンクリート製の拝所があり、これを地域の人々は苗代殿と呼んでいる。この拝所の一部にはかつて礎石として利用されていたと思われる石（微粒砂岩）がはめ込まれている。

現在のところ、苗代大比屋とのかかわりは不明であるが、周辺からは青磁片などが表採されている。



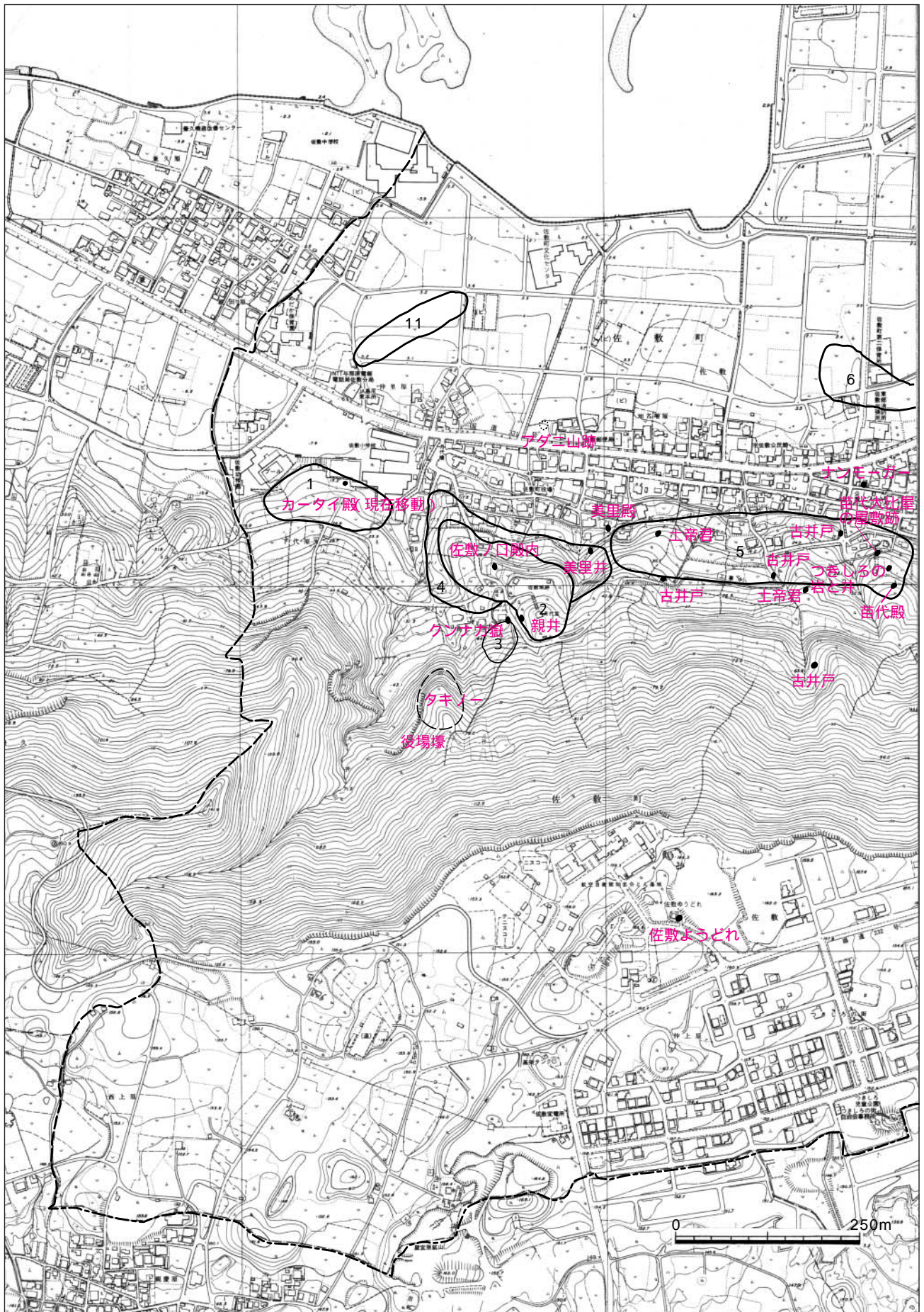
写真8 苗代殿



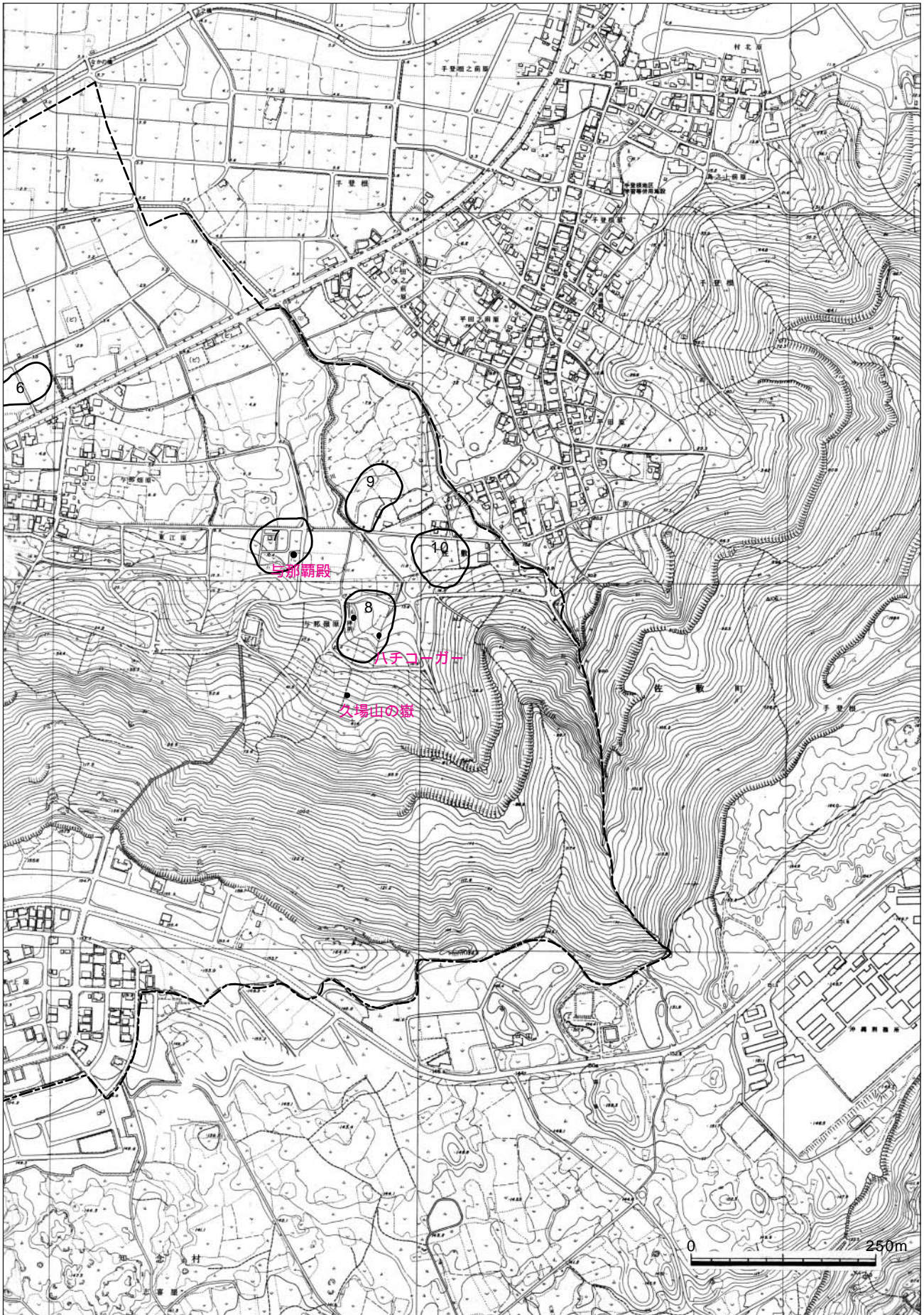
写真9 佐敷ようどれ

* 佐敷ようどれ

1764年に、字佐敷西上原の崖下にあった墓が、風雨のため欠損が激しいことから、現在地に移築された。墓内には尚思紹夫婦、美里子夫婦など7名の遺骨が安置されたという。その後、1959年には字新里の崖下にあった佐銘川大主夫婦の遺骨も移された。現在、航空自衛隊知念分屯基地内にある。1958年に県指定文化財（史跡）となった。



第2図 字佐敷遺跡分布図 1 下代原遺跡 2 佐敷上グスク 3 佐敷上グスク関連遺跡 4 島之上原遺物散布地 5 島原遺物散布地



6 安志田原・苗代原遺物散布地 7 東江原遺物散布地 8 与那嶺原遺物散布地 9 奥増原遺物散布地 10 根堂原遺物散布地
11 仲里原遺物散布地



写真10 タキノ

* 佐敷上グスク関連遺跡

上グスク南西側に位置し、上グスクとタキノに挟まれる標高約52mの傾斜面である。この傾斜面に明瞭な包含層が確認されており、拾える遺物は佐敷上グスクと年代が近い。また、焼けた土が多く確認されることから、何らかの生産活動が行われていた場所と想定される。

現在は給水タンクが設置されている。

* タキノ

上グスク南西側に位置するこんもりとした丘で、役場の壕と呼ばれる壕や、字佐敷の拝所であるタキノの嶽（タキ）やクンナカノ嶽（タキ）がある。

地形的には、上グスクよりも約30m高く、上グスクの見張り台があったと考えられることから、平成10年度に丘陵の先端部に試掘調査を入れた。そこでは、平坦な面をつくるために段状の造成を行ったと判断される面が確認されたが、明確な年代は不明である。



写真11 佐敷上グスク関連遺跡



写真12 旧道

* 旧道

佐敷上グスク周辺で確認される旧道は4本あり、内3本は崖上の「つきしろ」につながる道となっている。1本は、佐敷上グスク西側の丘陵から下代線水源地に登る「下代原バンタ」、2本目が東側には旧佐敷ようどれ付近を通り現在のようどれに至る旧道、3本目は、苗代大比屋の屋敷跡周辺からのぼる「苗代線」である。石畳を確認したのは3本目の旧道である。

* 下代原遺跡

佐敷上グスクから北西側に約280m離れた緩やかな地形で確認された遺跡。佐敷小学校の増改築に伴う発掘調査では、12世紀から16世紀までの年代幅をもつ遺跡であることがわかった。また、鉄を生産するさいに出る鉄くずなども発見され、遺物の年代からグスク時代に製鉄を行っていたことが確認された。

遺跡の一部は、サトウキビ畑として使用される場所に広がると予想される。

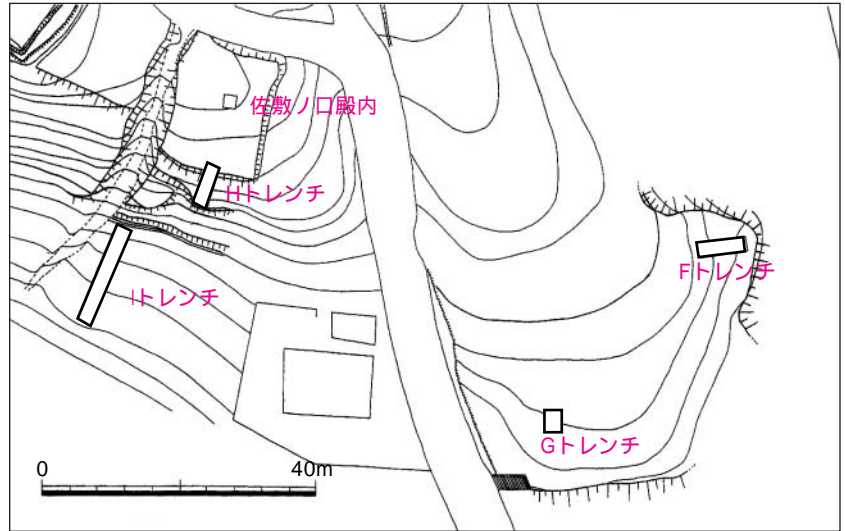


写真13 下代原遺跡

3：調査状況

1) 平成12年度

佐敷上グスクから北西側に延びる丘陵で、上グスクと関係をもつ遺構があるかの確認を目的に調査を行なった。試掘トレンチは4カ所に設け、トレンチの名称は平成10年度の町内遺跡詳細分布調査での試掘調査に続けて、アルファベットの大きい文字であるF～Iを冠し、各Fトレンチ、Gトレンチ、Hトレンチ、Iトレンチとした。夏の太陽は高く上るため、日陰がほとんどできない調査であった。



第3図 平成12年度 佐敷上グスク調査箇所

Fトレンチ

設置場所は、上グスク主体部から約140mの北西側斜面で、標高は約27mを計る。規模は、南北に2m、東西に7mの試掘区である。サトウキビ畑として利用していたこともあり、耕作された土が深く堆積していたが、一部で18世紀前後の土層を確認した。

遺物はグスク土器片、類須恵器片、青磁片、陶磁器片などがある。



写真14 Fトレンチ 近世の包含層(西側より)

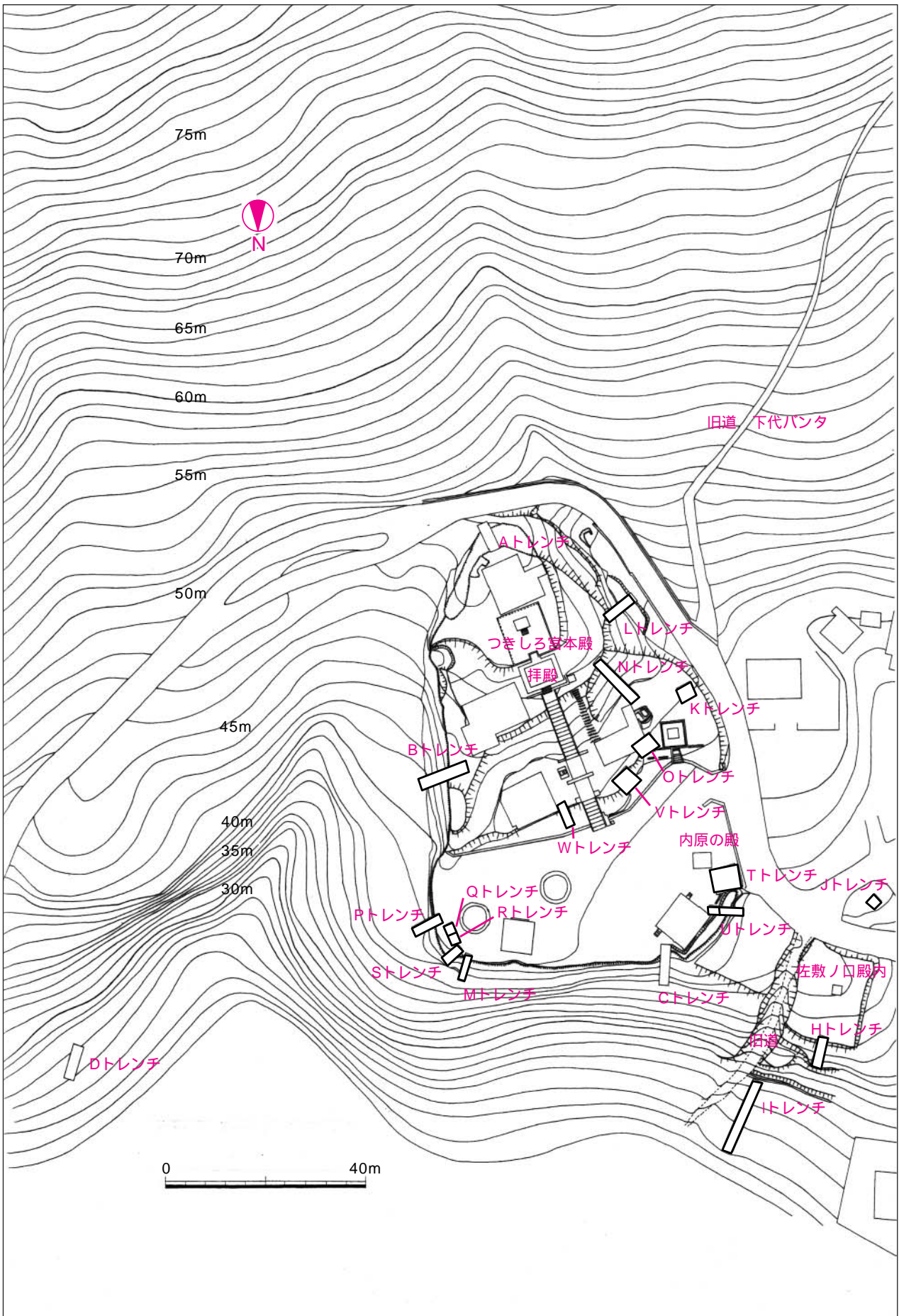
Gトレンチ

設置場所は、Fトレンチと同じ休耕地内で、標高は約28mのやや平坦な場所に南北3m、東西2mの試掘区を設けた。表土から約40cmまでは耕作土と判断されたが、それ以下は地山まで貝や焼土のみを少量含む層であった。また、地山面には方形状に掘りこんだ土坑の一部が確認された。年代は不明である。そのほか遺構としてはピットを4個確認した。

耕作土中から土器片、青磁片、陶磁器片などが出土している。



写真15 Gトレンチ 土坑掘り下げ状況(北側より)



第4図 佐敷上ガスク周辺地形図および調査箇所位置図



調査年度

平成10年度 町内遺跡詳細分布調査

AトレンチからEトレンチ

平成12年度 佐敷上グスク範囲確認調査

FトレンチからIトレンチ

平成13年度 佐敷上グスク範囲確認調査

JトレンチからSトレンチ

平成14年度 佐敷上グスク範囲確認調査

TトレンチからWトレンチ

Hトレンチ

設置場所は、上グスク主体部から北西側約50m離れた傾斜面で、標高は約30mから35mを計る。南北に6m、東西に2mの試掘区で、佐敷ノ口殿内の背面にあたる。なお佐敷ノ口殿内は、石列が確認された標高より約3m高い地表に建立されている拝所である。拝所周辺においては遺構面の確認は行っていないが、Hトレンチ上部平坦面の状況を考慮すると、少なくとも60cm下面に包含層あるいは遺構面がのこると想定される。試掘区の斜面において、表土から15cm程下に良好な遺物包含層と貼石状石列を確認した。石列は大人の頭ぐらゐの石を並べており、高低差約2.5mの間に5列確認できた。これらの石列は、層の観察から、地山を段々に削って石を並べていることが判断された。また斜面地のため、石列の上を覆っていた包含層は薄く、上部から流れ込んだ状況も認められた。一方、斜面上部の平坦面は、地表から60cm下まで耕作土あるいは攪乱層が確認されている。

遺物には、グスク土器片、青磁片などがあり、佐敷ノ口殿内が近くにあったためか、指輪も発見された。



写真16 佐敷ノ口殿内



写真17 Hトレンチ 貼石状石列（北側より）

Iトレンチ

設置場所は、Hトレンチから北側の休耕地で、緩やかな傾斜面に南北15m、東西に2mで試掘区を設けた。その試掘区をさらに南北に2mごとにわけ、計5つの小グリッドをつくり、南側から1～5までの数字を冠した。

この5グリッドのうち、1および3～5グリッドまでを掘り下げて調査を行った。

I-1グリッド

表土から約20センチは耕作で天地返しを受けた層であり、それ以下の地山までは、無遺物層であった。一部、地山に溝状遺構が東西に確認されたが、遺物が出土しないため年代は不明である。

I-3～5グリッド

もともと耕作地であったため、攪乱層が主であるが、地山上の10cm前後には18世紀前後の遺物を含む層が確認された。また、グリッド4では、高低差60cmの段を確認し、段下の一部に石が積まれている状況を検出した。

遺物は、グスク土器片、類須恵器片、青磁片、陶磁器片などである。また、牛の骨と思われる食物残渣が多く見られた。



写真18 I-1トレンチ 完掘状況（北側より）



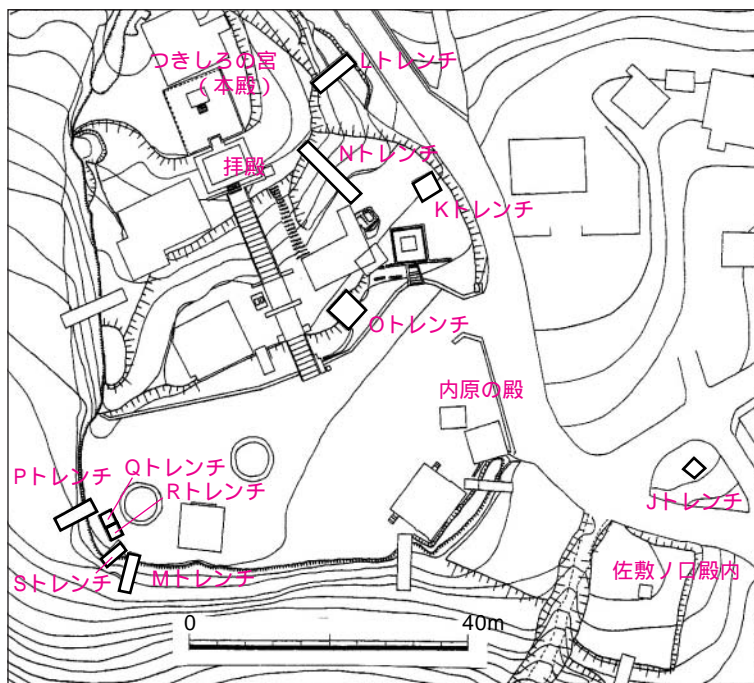
写真19 I-3～5トレンチ 段状地形（南側より）

2) 平成13年度

夏と春の調査で、計10カ所のトレンチで調査をおこなった。目的は大きく次の4点にしばった。上グスク主体部西側での城域の広がりを確認すること、北東側での平場構造を確認すること、の調査補足として平場の方向を確認すること、の広場と平成10年度のBトレンチ貼石状石列が確認された斜面との間で、どのような遺構があるかを確認することである。

このために設置したトレンチは、
についてはJ～Lトレンチの3カ所、
についてはMトレンチの1カ所、
についてはN～Oトレンチの2カ所、
についてはP～Sトレンチの4カ所
である。

また、JトレンチからOトレンチまでは夏の調査、PトレンチからSトレンチまでは春の調査で実施した。



第5図 平成13年度 佐敷上グスク調査箇所

Jトレンチ

設置場所は、上グスク主体部より北西側約40mの地点である。3方向を道路に囲われた平坦地で、標高は約36mを計る。南北に2.5m、東西に2mの試掘区で、周辺はデイゴが植樹されている。掘り下げたところ、地山の地形が南から北側にかけて急な斜面になっていたが、上グスクと関わりのある遺構は確認されなかった。この地山が、道路を整備する時に削られたかどうかについては調査範囲が狭いことから即断できない。

遺物は、攪乱層からであるが、白磁片、青磁片、陶器片などが確認された。



写真20 Jトレンチ 完掘状況(南東側より)

Kトレンチ

設置場所は、上グスク主体部内西側、宇佐敷の慰霊碑が建立される南側の平坦面で、標高約42mを計る。南北に3m、東西に3mの試掘区である。表土から15cm下に遺物包含層が確認された。包含層中にピットも検出されたが、植樹の時の穴と判断された。このほかトレンチ北側に3列の石列が確認され、その石列は東西方向にやや北側にカーブして並んでいる状況で、トレンチ西側にある道路にものびていたと想定された。

遺物は、青磁片が主であった。



写真21 Kトレンチ 石列(北東側より)

Lトレンチ

設置場所は、上グスク主体部西側斜面で標高約43mから46mを計り、近くには親井と呼ばれる井戸がある。試掘区は、南北に2m、東西に8mで設けた。上部平坦面、斜面、下部平坦面の地形変化に富む。上部および斜面では貼石状石列遺構を確認した。

この石列遺構は4つの列をもち、また一部上部から下部へ向かう溝状遺構が検出された。また下部では17世紀頃の整地面を確認した。

遺物はグスク土器片、青磁片、陶器片などである。



写真22 Lトレンチ 貼石状石列(南西側より)

Mトレンチ

設置場所は、上グスク主体部北東側斜面で、近くに休憩所がある。標高約37mから41mを計り、試掘区は南北に10m、東西に1.5mで設けた。

表土から約60cmは攪乱層で、近年に上グスク内を整備したときの土砂層と判断された。その下には遺物包含層があったが、貼石状石列は確認できなかった。但し、上部平坦面に大人の頭2つ分ぐらいの石を2、3段ほど積み重ねた遺構と、ピットが5個確認された。

遺物はグスク土器片、青磁片などである。また、貝類の出土が多かった。



写真23 Mトレンチ 石積(南側より)

Nトレンチ

設置場所は、上グスク主体部内にある斜面で、上グスクの旧階段といわれる石段の近くに設けた。この斜面の標高は約37mから40mを計り、試掘区は南北に11m、東西に2mで設置した。表土から約40cmで地山になっており、薄く遺物包含層がのこると判断される。

地山は段状に造成され、一段の高低差は50cm前後を計る。造成の年代は確認できなかった。

遺物は、グスク土器片、青磁片などである。



写真24 Nトレンチ 段状造成(北西側より)

Oトレンチ

設置場所は、上グスク主体部の西側、字佐敷の慰霊塔のすぐ東に、南北3m、東西に4mで設置した。近くには、かまど跡として多くの人々が拝む場所もある。この調査区では、表面から15cm下にグスク時代の層が堆積しており、さらに掘り下げると土を盛ったと判断される造成面がでてきた。この造成面には多くの石が点在しており、一部では列をなすものも確認された。

遺物は青磁片、陶器片などである。



写真25 Oトレンチ石積など(南西側より)

Pトレンチ

設置場所は、上グスク主体部の東側にあたる標高40m程度の傾斜面で、太陽光の当たりがいいのか、雑草が勢い良く茂っていた。そのため、その雑草を取り除くのに2日程度費やした。

調査区は、南北に2m、東西に6mで設置した。掘り下げた斜面の一部に、わずかながら貼石状の石列が確認された。

遺物は青磁片などである。



写真26 Pトレンチ 貼石状石列（西側より）

Qトレンチ

設置場所は、Pトレンチの北側で、南北に2m、東西に2mの調査区である。Pトレンチに比べると平坦な場所であり、柵の穴跡を期待したが、実際に掘り下げると、地形が急斜面となり、貼石状石列が発見された。

この石列は、Pトレンチでは崩れていると考えられるが、次に述べるRトレンチには明瞭につながっている。

遺物は、グスク土器片、青磁片、陶器片などである。



写真27 Qトレンチ 貼石状石列（北東側より）

Rトレンチ

設置場所は、Qトレンチの北側で、Qトレンチと同様に平坦な面に、南北に2m、東西に2mで設置した。この調査区は、Pトレンチの貼石状石列と、Mトレンチで確認された石積の間が、どのような構造でつながっているかを確認するために設けた。Pトレンチ同様貼石状石列が確認され、列がQトレンチからつながっていることが明らかとなった。

遺物はグスク土器片、青磁片などである。



写真28 Rトレンチ 貼石状石列（北東側より）

Sトレンチ

設置場所は、Rトレンチ北西側の斜面で、夏の調査区であるMトレンチと2mも離れていない。南北に4m、東西に1.5mの調査区である。深さ約150cmまで掘り下げて、ようやく貼石状石列を確認した。しかしながら、上からの土砂により崩れていると考えられる。

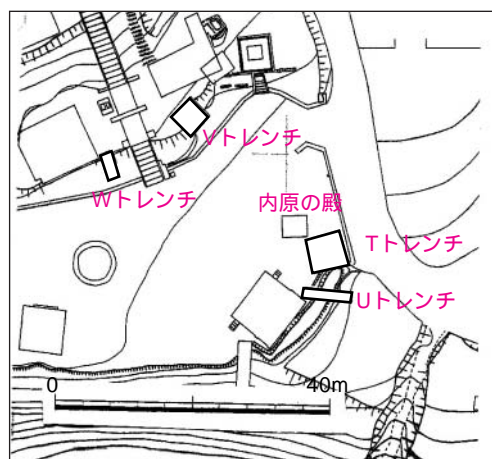
遺物はグスク土器片、青磁片、陶器片などである。



写真29 Sトレンチ 貼石状石列（北東側より）

3) 平成14年度

整備計画に記載された聞き取り調査の情報から、上グスクのもともの入り口と考えられる場所の確認と、地形の読み取りから想定された平場の確認を目的に、4箇所のトレンチを設定した。まず、入り口として考えられたのは、コンクリート製の舞台の脇から内原の殿の間で、TトレンチおよびUトレンチの2つのトレンチを設置した。また、平成13年度のKトレンチからOトレンチへつなぐと想定された石列を平場の境界とすると、その続きをOトレンチ東側で確認することが必要と判断し、Vトレンチを設置した。また、Vトレンチの表面にある石の並びが、コンクリート製の階段のさらに東側にある石の並びにつながり、K/O/Vと一続きの平場の可能性があると判断した。そこで、その位置にWトレンチを設定した。



第6図 平成14年度 佐敷上グスク調査箇所

Tトレンチ

設置場所は、上グスク主体部の西側にあたり、広場に設置されている舞台近くに、南北に5m、東西に5mで設置した。表土から15cm下に遺物包含層が残存しており、石積らしき遺構も確認できた。

一方、地山は道路側に向かうにつれて傾斜しており、その傾斜面にも石がとびとびに貼り付いている状況が確認された。これらを貼石状石列と想定したいが、残存状況がわるく現在の段階では断言できない。また、トレンチ隅で方形土抗の角と思われる部分が認められたが、全容が不明のため埋め戻した。

遺物は、グスク土器片や青磁片、角釘などがあった。また武具類の出土も見られた。



写真30 Tトレンチ 石積根石(南側より)

Uトレンチ

設置場所は、Tトレンチの北側、舞台のすぐ脇に南北1.5m、東西に7mで設置した(後の拡張部も含む)。外面で石積みの根石が確認された。しかしながら内側の面は明瞭ではなく、石の並びから約2m幅で造られたと想定している。その後、さらに約1m内側に石をつんだと思われる状況が認められているが、範囲が狭いため用途などは不明である。

遺物は、土器片や青磁片、角釘などである。また武具類の出土もみられた。



写真31 Uトレンチ 石積根石(西側より)

Vトレンチ

設置箇所は、コンクリート製の階段から西側に約3mほど字佐敷の慰霊塔側へ寄った場所である。南北4m、東西に4mで設置した。表土から15cm程度下に遺物包含層が確認されており、遺構は、あたらしいもので近世の整地面が発見された。また、その下からは高さ1.5m程度の石積が発見できた。この石積は、面をもつが、積み石は1個体ごとに丁寧な成形をしておらず、石の組み方もやや粗い。石積には積み直している状況も認められた。地表に露出している石をたどると、南北方向に向かう石積に西側からやや直角にあたるように積まれている。南北方向に並ぶ石積は東側に向けて曲がると推測される。これらの石積と先の近世の整地面と併せると、佐敷上グスクが数回整備されていたことを示す。石積の前面には平坦な面が続くと予想され、その平坦面が御庭として利用されていたのではないかという想像も膨らむ。

遺物は、グスク土器片や白磁片、青磁片などである。また、貝類が多く出土している。



写真32 Vトレンチ 石積など(北西側より)

Wトレンチ

設置箇所は、コンクリート製の階段から東側に約2mほどの場所に、南北6m、東西に1.5mで設置した。表土から15cm下に石が混在する状況が検出された。この一部は1979年に調査した第3地区が重複しており、その調査報告書に記載されている「性格不明の石組み」と判断された。これらは無秩序に転がっているように思えたが、掘り下げていくうちに、石積の中込ではないかと考えられた。

このトレンチで発見された石積は、Vトレンチと対称になる位置であるが、石積の方向はトレンチの幅が狭いため明確ではなく、Vトレンチと比較検討するにはいたっていない。

遺物は、グスク土器片や白磁片、青磁片、石器片などである。また、食物残滓も多く出土した。



写真33 Wトレンチ 石積(北側より)

4：出土遺物

佐敷上グスクが使用されていた年代や状況を判断する上で、貴重な情報を与えてくれる遺物。現地で製作されていた土器や中国や東南アジアなどで作られ運ばれてきた陶磁器類など、佐敷上グスクから発見される遺物は多くの種類が見られる。年代も、試掘場所により時代幅はあるものの、13世紀から18世紀頃にわたる。また、上グスクの北側に広がる幸豊かな海からもたらされた魚貝類や、牛などの獣骨等も食生活の情報を与えてくれる遺物として重要である。現在、貝や魚などは、種類を判定する作業を行っており、15種類ほど確認されている。

グスク土器

グスク土器には、鉢形もしくは鍋形を主として、この他に、壺形や碗形などがある。うつわ表面がざらつくもの、なめらかなものなどいくつかの種類がある。また、ススが付着しているものもある。ほとんどが割れた状態で出てきており、大きさは5cm角以下のものが多い。接合すると、もとの形に復元できるものもある。一般的な大きさは、鉢形や鍋形で胴まわりが25cm前後、高さが15cm前後である。



写真34 出土遺物 1 グスク土器

類須恵器

類須恵器とは、鹿児島県奄美群島徳之島において、11世紀から13世紀頃に作られ、琉球列島全域に流通していた陶器であることがわかっている。別称カムイ焼きとも言う。形は壺形もしくは鉢形が多い。うつわの表面の色が灰色で内面が褐色のものが一般的で、製作するときに粘土を叩いて伸ばした跡がみられるものもある。



写真35 出土遺物 2 類須恵器

白磁および青白磁

白磁は、沖縄県内において12世紀頃から見られる中国産の磁器で、碗形や皿形が多く発見されている。一口に碗形、皿形といっても時代により形に変化が見られる。写真は白磁および青白磁の外底が5点あるが、おのおの、高台の形に違いがあるのが見てとれる。写真上段中央の青白磁の底は、やや広めであるが、その下の白磁の底は細くて高い高台がついている。また、写真上段右の青白磁の底は、いわゆる碁笥底である。



写真36 出土遺物 3 白磁・青白磁

青磁

青磁とは、ガラス質の焼き上がりをみせる、青みがかかった緑の釉薬がかけられた磁器で、主に中国から輸入されたものである。形は、碗、皿、盤、壺など多様であり、佐敷上グスクの出土品としては、碗が多く見られる。各トレンチにおける青磁の出土は、VトレンチやWトレンチでは出土が多く、嗜好品と考えられる花盆台などが見ついている。一方、佐敷上グスク辺縁部と考えられるFトレンチやイトレンチにおいては、破片がやや小さく数も少ない。そのため、上グスクの主体部は、やはり「つきしろの宮」の拝所が建立される箇所ではないかと想定される。

青磁碗（写真37）は、13世紀頃から16世紀頃のものが出土している。数的には、14世紀後半から増加する傾向にあり、碗の口縁が外に反りやや大ぶりな感のものや、器の外面に文様がないものが多い。その中には、1979年の発掘調査により一カ所でまとも出土したいわゆる佐敷タイプと称されるものもある。

青磁盤は写真では4点掲載している（写真38上・中段）。内面にヘラ文や花草文があるのがみてとれる。

青磁皿は写真では3点掲載している（写真38下段）。そのうちの写真下段左の1点は、内面に櫛状の工具で描いた文様が観察できる。

その他の青磁として、酒会壺の蓋（写真39左上段）および身の口部分（写真39左下段）、花盆台（または器台）（写真39右上段）、青磁のすり鉢（写真39右下段）を写真に掲載した。これらは、一般的に使用されるのではなく、趣向品として、重要な儀礼もしくは宴席などで使用されたと考えられる製品である。

染付（青花）

中国やベトナム、日本などで生産された、白地に青色で文様を描いた磁器を称する。写真の右上段2点は、中国（明朝）の染付けで青花とも呼ばれ、外面の文様は、唐草文と思われる。右下段1点は、日本の有田焼で内面の文様に蛸唐草文が確認できる。左3点はベトナム産と思われる、全体的に茶色味を帯びた色彩をしている。文様は、草花文と思われる。

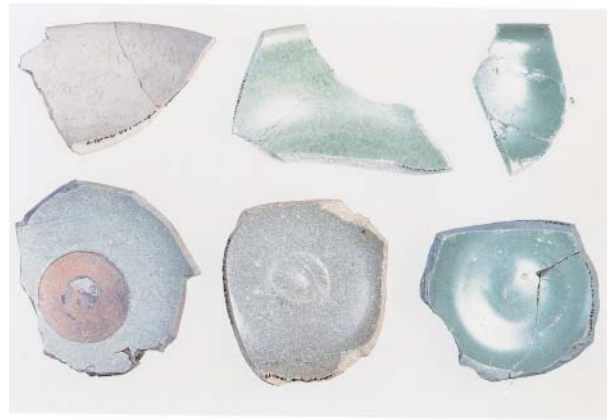


写真37 出土遺物4 青磁（碗）



写真38 出土遺物5 青磁（盤・皿）



写真39 出土遺物6 青磁（その他）



写真40 出土遺物7 染付（青花）

東南アジア産陶器

褐色の釉薬が塗られたものは、褐釉陶器と称され、多くが壺形をしている。写真の右2点が東南アジア産の褐釉陶器であり、土がやや灰色味をおび、混入物が見られる。

交易時代の琉球へ運び込まれるときには、中に酒をつめていたと考えられ、その中身がなくなると、貯蔵用の容器として再利用されていたといわれている。

写真左1点は、東南アジア産陶器の播鉢である。内面に播鉢特有の櫛目が観察される。また、黒く付着しているものは、褐釉と思われる。



写真41 出土遺物8 東南アジア産陶器

天目

黒釉がたっぷりとかけられた碗であり、中国あるいは日本で製作されていた。形は碗であり、「茶」の道具として用いられていると考えられる。胎土は主に、乳白色で黒粒が混入するものが多い。



写真42 出土遺物9 天目

沖縄産陶器

佐敷上グスクからは、近世の生活資料も出土している。写真には、カラカラの口、灰釉碗、急須、陶器壺を掲載した。

主に、Fトレンチやトレンチなどでこれらの遺物が多く出土しており、近世の字佐敷集落が、上グスク下辺にひろがっていたことが想定される。



写真43 出土遺物10 沖縄産陶器

鉄製品

武具として、鉄の鎌(やじり)(鉄鎌:てつぞく)が写真44上段の左2点、刀の一部(刀子:とうす/切羽:せっぱ)が写真44上段の右2点があげられる。鎌とは、矢の先につけ目的のものにつきささる部分をさし、佐敷上グスクからは鉄製の鎌が数点確認されている。主にT・Uトレンチからの出土が多い。また、刀子とは、いまでいう「小刀」、「ナイフ」であり、切羽は刀の柄と刃を仕切る部分に使われる部品である。

また、これらの鉄製品をつくるための鉄を精錬す



写真44 出土遺物11 鉄製品①(鉄鎌・刀子・切羽・鉄滓)

るときにできた廃棄物である鉄屑(鉄滓：てっさい)が写真44下段である。これまでの調査では、上グスク内に鉄の生産をおこなう遺構は確認されていないが、こうした遺物の出土から、その生産遺構が近くにあることが想定される。

また、建築資材として釘がみつまっている(写真45)。これらの釘は、断面の形が四角をしており、現在の釘と見分けがつく。また、写真45左の1点は、古銭を4枚ほどかませとして利用している。武具類・釘は、佐敷上グスク北西側からの出土が多かった。

おはじき・碁石

おはじき、あるいは碁石として用いられたと考えられる製品。完全な形が残っているものは、楕円あるいは円形をしている。直径は、約1cmから3cmぐらいと考えられ、厚さは5mm程度である。写真右2点は、円形にするために削った後に磨いていると考えられる。

その他(瓦・玉・指輪・石器類)

その他に、瓦(写真47)、玉(写真48)、指輪(写真48)、石器類(写真53・54)などが出土している。

瓦は、明朝系の赤瓦であり、瓦の表面(瓦当面)にボタン(牡丹)をモチーフにした文様が見られる。佐敷上グスクからの出土はこの1点のみである。

装飾用あるいは祭祀用として利用されていたと考えられるのが、玉と指輪である。玉は直径が約7mmであり、貝製とガラス製が発見されている。また、指輪は銅製で、表面にはわずかであるが、文様が見られる。

石器には斧やハンマーなどがあり、木を切り出したり魚介類あるいは果実類を調理するための道具として使われていた。石材は佐敷町であまり見られない。また、長崎県産の滑石(表面が滑らかで、削りやすい)が出土しているが、これは石鍋であったものの破片と考えられる。



写真45 出土遺物12 鉄製品②(角釘)



写真46 出土遺物13 おはじき・碁石



写真47 出土遺物14 その他(瓦)



写真48 出土遺物15 その他(玉・指輪)

食物残滓

佐敷上グスクの調査では多くの食べかすも出てきている。

写真で掲載したものは、牛（写真49）、イノシシもしくは豚（写真50）、亀の腹甲（写真51）、魚骨（写真52）である。

写真49中央の牛骨をみると、刃物できれいに切られた痕が確認できる。これは、中の骨髓のだしをとるための解体痕と考えられる。このほかにも、肉をさばくための解体の傷が残っている骨もあった。

魚骨は小さく、見つけるもの大変で、歯や背骨以外はなかなか見つけ難い。写真に掲載された魚骨は、現在、魚の種類を調べるための整理が行なわれている。

これら獣骨、魚骨以外にも、貝の殻も出土している。量としては、アラスジケマンガイが圧倒的に多く、ついでカンギクガイである。これらの貝を多く含む貝層が、Iトレンチ、Mトレンチ、Oトレンチ、Rトレンチ、Vトレンチ、Wトレンチで確認されている。こうした貝も種類を調べて、一般的な生息地も情報として収集している段階である。



写真49 出土遺物16 獣骨①（ウシ）



写真50 出土遺物17 獣骨②



写真51 出土遺物18 亀腹甲



写真52 出土遺物19 魚骨

5：まとめ

平成12年度から平成14年度までの3カ年にわたって範囲確認調査を実施し、調査箇所は18箇所、調査面積は約210m²におよんでいる。調査の目的は、佐敷上グスクの城域が、どこまで広がりを見せるかを確認することであり、従来の佐敷上グスクは、いわゆる「つきしろの宮」と認識される範囲のみと捉えられていた。しかしながら、3カ年の調査で、北西側の耕作地や、字佐敷集落の中にまで城壁（石列）や包含層が広がることが想定される結果となった。

なお、これまでの調査で確認した佐敷上グスクの城壁には、2つの構造があると考えられる。

一つ目は、貼石状石列と称される構造である。これは、斜面において見られる構造で、地山面を階段状に削り、石と土を詰め込み造られている。この「貼石状石列」は、佐敷上グスクの東側（H10・Bトレンチ / H14・P～Sトレンチ）および北側（H10・Cトレンチ / H12・Hトレンチ）、西側（H13・Lトレンチ）で確認されている。

現在、地崩れ指定区域の多い佐敷町内では、谷筋で地崩れを防ぐための工事が行なわれている箇所がよく見受けられるが、この「貼石状石列」も同様に、土留めの要素をもって作られた可能性がある。あるいは中城湾を往来する商船に対して、他グスクに見られる石積城壁が佐敷上グスクにもあるように見せるための手段として用いられたことも推測される。

二つ目の城壁は、他グスクにみられる石積である。高さは不明であるが、幅は1.5m程度のものが発見されている。確認された場所は、おおむね平坦な場所であり、グスクの南側（H10・Aトレンチ）および北西側（H14・Uトレンチ）、北東側（H13・Mトレンチ）の3箇所となっている。

次に佐敷上グスク主体部を現状でみてみると、いわゆる「つきしろの宮本殿」の建つ平場（1段）、「つきしろの宮拝殿」東側の平場（2段）、「字佐敷慰霊塔」や「カマド跡」がある平場（3段）、「休憩所」や「舞台」が建てられている平場（4段）の4つの場をもつ段状になっており、それぞれの段ごとに建物や造成の跡が見られる。このことから、佐敷上グスクは幾段かの平場で構成されるグスクと捉えることができる。

この平場のうち、2段目と3段目をつなぐ斜面で、地山を段状に削り整地した状況が認められた（H13・Nトレンチ）。また、3段目においては、石積（H14・V～Wトレンチ）や、平場を造るために土や石を盛ったと想定される遺構（H13・Oトレンチ）および、西側に延びる石列（H13・Kトレンチ）を確認している。

こうした、上グスク主体部で確認される平場は、先に述べた北西側の耕作地にのびる丘陵へつづくことが想定される。特に、調査を入れた休耕作地内では住居あとと考えられる土拵が認められ（H12・Gトレンチ）、その周辺（H12・Fトレンチ）ではかなりの遺物を拾うことができた。また、グスク主体部北側の斜面下（H12・Iトレンチ）でも、遺物を拾うことができる。

このように、点で確認された「貼石状石列」や「石積」などを線で結び、その周辺にひろがる遺構や遺物の散布状況を踏まえると、今日まで一般的に認識されている佐敷上グスクの範囲は、さらに広がり、西側に約120m、北側に約60mほど拡大することが想定される。

さて、佐敷上グスクの年代であるが14世紀後半を中心として16世紀頃までと捉えることができる。試掘の場所によっては、年代が新しくなる遺構もある。このことは、佐敷上グスクが継続的な使用をされていたことを示すが、こうした時間の変遷と上グスクの構造の変化あるいは広がりなどが捉えきれなかった。

最後に、今回の調査では、城壁構造や佐敷上グスクの範囲が広がることが確認された。城壁構造である「貼石状石列」は主に海に面した北側斜面および北東側斜面で確認されている。しかしながら、佐敷上グスクから西側のタキノーあるいは下代原遺跡との間においては、明確な城壁構造は確認されていない。石垣などがなかった可能性も考えられるが、住宅等やサトウキビ耕作地が広がっているため、調査をする場所が限られており確認できないことも要因のひとつである。

その他に、佐敷上グスク内の平場の構築が想定される調査結果となっている。特に、3段目の平場では、その造成を推測させる遺構や、4段目の平場が御庭（ウナー）として利用されていたと想定させる石積が検出されている。さらに、平場構造として、一番上の平場の後方に石垣があり、その他の平場は斜面に貼石状石列あるいは切岸があると捉えられる。

しかしながら、3カ年の調査では確認された遺構の年代あるいは各遺構の時間の変遷が捉えきれず、また、佐敷上グスク内に構築された平場が何段あるのかあるいは集落までのびるのかなど、平場の全体的な

構造がつかみきれしていない。また、構造物の時間変遷が明確になっていないこともあげられる。

3カ年の調査で18カ所の調査区を設定したが、佐敷上グスクの明確な平場構造や城壁構造、また、これらの遺構あるいは構造物の年代・時間変遷を捉えるには、時間がかかると考えられる。

6：今後の課題

佐敷上グスクの城壁が貼石状石列と石積の2要素をもつことが判ったが、これら石列と石積が接する場所ではどのような構造をしていたかを確認する作業、あるいは北西側にのびる石列や貼石状石列がどこまで続いていたのかなど、広がりを見せる佐敷上グスクの城域を確認する作業は時間を要する。

さらに、平場内外での増改築の痕跡や、現在、駐車場として利用される広場の下部において遺構が残っている可能性が十分想定される結果となっていることから、こうした平場内の遺構性格調査などが必要になると思われる。

一方、周辺地域に視点を向けると、佐敷上グスク西側にある給水タンク設置個所付近には、遺物包含層が確認され、年代的にも佐敷上グスクと時期を同じにすると思われる。また、12世紀から16世紀の年代幅をもつ下代原遺跡が、佐敷上グスクから北西方向にあり、製鉄に関わるおおくの遺物が発見されている。これらの遺物は、尚巴志が鉄を貿易船から入手し、農具を作らせて農民に分け与えたとの伝承と関わりを想起させるものである。

また、東側には、美里殿や苗代大比屋の屋敷跡など、尚巴志に関わる拝所を含む遺物散布地が広がり、青磁片などが表彰されている。

このことから、佐敷上グスクがグスク単独で存在していたのではなく、周辺地域とのネットワークの中での中心としての役割を果たしていたと想定することができる。こうしたことをふまえると、佐敷上グスクを個別の遺跡として捉えるのではなく、西側には生産活動の場、東側には生活の中心となる集落が広がっていたことを想定し、周辺遺跡を含んだ佐敷上グスク群としての全体評価が必要と考える。そのためには、今後の調査に周辺遺跡との関わりを考古学的に検証していくことを考慮する必要がある。

また、時代は新しくなるが、18世紀前後の遺構が佐敷上グスク北側周辺から発見されている。このことは、首里城において琉球王国統治が行なわれている間も佐敷上グスクが何らかの形で利用されていたことを示すのか、あるいは、18世紀の佐敷集落は佐敷上グスク北側斜面下まで広がりを見せていたことを示すのかなど、検討する必要がある。

再度、今後の課題を確認することになるが、これからの佐敷上グスクの調査は、狭義的な意味での城域を確認する作業として、城壁構造の解明および平場内の遺構性格などをおこない、グスクの性格をさらに明確にする必要がある。また、広義的な意味での城域を確認する作業として、関連する遺跡・散布地などにおいて考古学的な調査をおこない、佐敷上グスク周辺を含めた佐敷上グスク群の全体評価を構築することも、念頭におく必要がある。

こうした作業は、従来の佐敷上グスク内で終始しがちであった「点」的な調査を、時代を共有する遺跡などと「線」で結びつけ、時代とともに移り変わる佐敷町の社会情勢あるいは構造など「面」的な広がりを解明する手段として重要と判断される。

(参考文献)

- 佐敷村教育委員会編 『佐敷グスクー佐敷グスク発掘調査報告』 1980年3月
- 佐敷町教育委員会「佐敷町の文化財」『佐敷町文化財』Ⅲ 1986年3月
- 立命館大学説話文学研究会・佐敷町教育委員会「沖縄・佐敷町の昔話」『佐敷町文化財』Ⅳ 1989年3月
- よりやげの根国計画委員会編 『よりやげの根国 第1回 シンポジウム 大交易時代と佐敷の歴史』
1996年2月
- 佐敷町教育委員会「第一尚氏関連写真集」『佐敷町文化財』Ⅳ 1996年3月
- 佐敷町企画財政課編 『佐敷グスク整備基本構想報告書』 1997年3月
- 佐敷町企画財政課編 『佐敷グスク及び周辺整備基本計画報告書』 1998年3月
- 佐敷町教育委員会「佐敷町の文化財 遺跡詳細分布調査報告書」『佐敷町文化財調査報告書』第2集
2000年3月
- 佐敷町教育委員会「佐敷下代原遺跡 佐敷小学校増改築工事に関わる緊急発掘調査報告」『佐敷町文化財調査報告書』第3集 2001年2月

(調査組織)

調査主体 佐敷町教育委員会 教育長 上原弘一

生涯学習課 参事 平田安彦(平成12年度～平成13年度)
照喜名順子(平成14年度)
課長 渡名喜元久
担当 城間宣子

調査参加者

上原忠徳 与那嶺清徳 玉城勝彦 下地直美 東恩納末子 綱川朋良 伊禮さおり 大嶺恵 嶺井須磨子
仲村朝美 宜保米子 普天間吉一 金城美由紀 木村謙介 松永洋平 伊礼智子 稲福恭子 崎原恒寿
大城磨美 高橋竜平 山中安麿 金城貴子 東藍 清さつき 野崎拓司 庄子丈暁 主税英徳 後藤徹也
久貝弥嗣 田中雄一郎 吉村法子 仲西美奈子 小谷真貴子 勝野智子 金城由憲 運天先勇 島袋博文
宮城睦男 城間隆行 山城光子 与那嶺ヨシ子

調査指導・協力 琉球大学考古学研究室 池田榮史 後藤雅彦
山本考古研究所 所長 山本信夫
鹿児島国際大学短期大学部長 三木 靖
福岡県九州国立博物館準備室係長 赤司 善彦
元国立歴史民俗博物館教授 吉岡康暢
沖縄県教育委員会文化課 記念物係 係長 島袋 洋
主任専門員 岸本義彦
専門員 上地 博
文化企画班
主任専門員 金城亀信
名瀬市立奄美博物館学芸員 高梨 修
前佐敷町文化財保護委員会会長 知念盛俊



写真53 出土遺物20 その他（石器類・表）



写真54 出土遺物21 その他（石器類・裏）



写真55 スナップ④



写真56 スナップ⑤



写真57 スナップ⑥



写真58 スナップ⑦

佐敷町文化財調査報告書 第4集

佐敷上グスク

- 平成12年度～平成14年度範囲確認調査概報 -

発行日 2003（平成15）年3月28日

発行 沖縄県佐敷町教育委員会

〒 901 - 1403

沖縄県佐敷町字佐敷307番地

TEL（098）947-1100

印刷 （協）丸正印刷

〒 903-0211

沖縄県西原町小那覇1215番地

TEL（098）835-8181

